

地水火風 17

牧野恒一

新宿の雑居ビル火災

9月1日「防災の日」の未明、新宿歌舞伎町の雑居ビルで、客など44人が亡くなる火災が発生した。1つの火災で10人以上の死者が出たのは、5月5日の千葉県四街道市の作業員宿舍火災（11人死亡）以来今年になって二度目だが、「その前は」というと平成2年3月の尼崎市「スーパー長崎屋」の火災（15人死亡）まで遡らなければならない。

二桁の死者が出る火災は11年以上発生していなかったのだが、今年になって間をおかずに連続して発生してしまった。

今回は、この火災について考えてみよう。

【雑居ビルの火災】

昭和50年代の前半に、多数の死者を伴う中小雑居ビルの火災が立て続けに起こった。東京都墨田区「サロンうたまろ」火災（昭和51年12月4日 6人死亡）、旭川市「二条プラザ」火災（同16日 3人死亡）、沼津市「らくらく酒場」火災（同26日 15人死亡）、新潟市「スナック エル・アドロ」火災（昭和53年3月10日 11人死亡）などである。

当時の記録を見ると、今回の火災との共通点が極めて多い。ハード・ソフト両面での大小さまざまな防火規制違反の存在、その是正の難しさ、違反ビルが多すぎて半分お手上げ状態の取り締まり当局、……などというところである。「うたまろ」と「らくらく酒場」が放火（の疑い）というところも同じである。そう言えば、現在ほどではないが、「構造不況」で景気も悪かった。

当時も、消防、建築両部局は一斉査察を行ったりして違反是正に随分と力を入れたものだが、その徹底は極めて難しかった。

飲み屋や雀荘の入っている「普通の」雑居ビルに入った折りに見ても、一つしかない階段にはビールケースが山積み、避難器具は冷蔵庫の裏でとても使えず、店と廊下の間にあったはずの防火戸はいつの間にかなくなっている、という具合である。雑居ビルの防火体制が20年前と比べて改善されているようにはとても見えない。風俗店の入った雑居ビルともなればなおさらだろう。

にもかかわらず、昭和50年代の後半以降、多数の死者を伴う雑居ビル火災が起こらなくなった、というのは、防火関係者の七不思議の一つだったのである。

【最近の雑居ビル】

事情通に聞くと、最近の歌舞伎町などの雑居ビルがややこしくなっていること、昭和50

年代の比ではないらしい。査察に行っても日本語が通じないことなど普通になったし、一つの店を午前、午後、夜、と3人の経営者が別の用途で使っていることなど珍しくもないということで、防火安全指導以前に、店の実態を把握することすら難しいようだ。

防火安全対策のうち、建物構造、防火戸、自動火災報知設備などを整備する義務があるのは、通常、建物の所有者である。登記簿などがあるからこれを特定することは出来ても、ヤクザやそれに近い人も少なくなく、また、所有者の所在がわからなかったり日本に住んでいなかったりする場合もあって、是正指導の実を上げようとするの大変である。

防火管理者を定め、消防計画を作り、消防訓練を行うことや、防火戸の前にモノを置かないとか階段に可燃物を放置しない、などのソフト対策は、各テナントの責任者の責務となる。普通の事業所でもなかなか完璧は期しがたいのに、風俗店となると指導の難しさは想像がつこうというものだ。まして、昼と夜とで営業形態や経営者が違っていたりすると、査察だけでも一日に何度も足を運ばなくてはならず、徹底するには大変なマンパワーが必要になる。

また、内装の不燃化や避難路や開口部の確保など、テナントの内装と密接に関係する場合は、ビルの所有者とテナントのいずれに責任があるのか判断し難い場合もあり、当然のことながら是正指導は困難になる。

あれやこれやで、雑居ビルの防火安全の確保を徹底することは、極めて難しいのである。

【雑居ビル火災から身を守るには】

例によってマスコミでは、「消防部局や建築部局は規制強化や違反是正の徹底を図れ」などという論調も見受けられるが、旅館・ホテルや福祉施設の火災に比べると、その声は小さい。ホテルニュージャパンの火災（昭和57年2月 33人死亡）を超えて、東京では戦後最大の死者が発生したというのに、そんな論調が思ったほどではないのは、この種のビルの違反是正が極めて難しいことは先刻承知だからだろう。

しばらくは一斉査察などで違反是正の徹底が図られるはずだが、それでこの種のビルの防火安全性を100%確保するのは難しいだろう。

結局、この種の雑居ビル火災から身を守るのは自分自身しかない。利用しないのが一番だが、普通の飲食店ビルでも似たりよったりのところもあるので、全く近づかないというわけにはいかない。

階段が一つしかないビルで火災に遭ったら、どうすれば助かるだろうか？

ビル内で火災が発生していることを知ったら、まず階段から逃げることを考え、店のドアを少し開けて外を確認する。煙がうっすらと漂っている程度なら階段室のドアのところまで行って同様にする。階段室の煙が「どうしようか？」と迷うような状態なら、一気に避難するのが正解である。階段が一つしかない小さなビルなら、避難に大した時間は要らないからである。

煙や熱気がひどくて「とても逃げられない」と感じるようなら、階段から逃げることは

すぐあきらめ、即座に階段室のドアを閉め、店に戻ってドアを閉めて籠城する。ここでモタモタしていると煙や熱に追われてドアを閉められなくなってしまう。間違っても「消火しよう」などとは思わないことだ。

ドアを閉めたら、隙間にタオルやおしぼりなどを詰め、煙や有毒ガスが入って来ないようにして時間を稼ぐ。それから携帯電話で119番をし、階数と店の名前と籠城人数を告げて消防隊に救助を頼む。その後、改めて店の中を見回して脱出ルートを考える。避難器具が設置されていれば（消防法に適合していれば普通は「避難はしご」か「緩降機」くらいはついているはず）それを使って逃げる。3階までなら飛び降りるという手もある。違法改装などで脱出ルートがない場合は、消防隊到着まで持ちこたえるよう努力する。木製ドアの場合は、カーテンなどを内側に貼って水をかけ温度を下げる。何もしなくても、ドアが鉄製の防火戸なら60分、網入りガラス製の防火戸なら20分は保つことになっているので助かる可能性はかなり高い。

いずれにしろ、自分でリーダーシップを取らないと助からない。こういう場面では、自信を持って指示する人がいれば、従業員も含めて、皆その人の言うことを聞くものなのである。